HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	山上憶良の「敬和熊凝歌」 : 長歌の〈道行き〉表現をめぐって
Author(s)	山本, 京介
Citation	国語国文研究, 131, 1-14
Issue Date	2007-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93488
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_131-01-14.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

山上憶良の「敬和熊凝歌」
――長歌の〈道行き〉表現をめぐって――

山本京介

一

筑前国守山上憶良、敬和へて、熊凝の為に其の志を述ぶる歌六首并せて序

大伴君熊凝は、肥後国益城郡の人なり。年十八歳。天平三年六月十七日を以て、相撲使某国司官位姓名の従人となり、京都に参向ふ。天さきはひせず、路に在りて疾を獲、即ち安芸国佐伯郡高庭の駅家に身故りぬ。臨終の時、長嘆息して曰く、「伝へ聞く、仮合の身は滅び易く、泡沫の命は駐め難し。このゆゑに、千聖既に去り、百賢留まらず、と。況むや凡愚の微者、何にぞ能く逃避らむ。但し我が老親並に庵室に在り、我れを待ちて日を過ぐさば、自らに傷心の恨みあらむ。我れを望みて時に違はば、必ず喪明の泣を致さむ。哀しきかも我が父、痛しきかも我が母。一身の死に向ふ途は患へず、ただ二親の生に在す苦しびを悲しぶるのみ。今日長別りなば、何れの世にか覲ゆること得む」といふ。

うちひさす　宮へ上ると　たらちしや　母が手離れ　常知らぬ
国の奥処を　百重山　越えて過ぎ行き　いつしかも　都を見む
と　思ひつつ　語らひ居れど　己が身し　労しければ　玉鉾の
道の隈廻に　草手折り　柴取り敷きて　思ひつつ　嘆き臥せら
く　国にあらば　父取り見まし　家にあらば　母取り見まし
世間は　かくのみならし　犬じもの　道に臥してや　命過ぎな
む〈一は云ふ、わが世過ぎなむ〉（五・八八六）
たらちしの　母が目見ずて　おほほしく　いづち向きてか　我
が別れなむ（八八七）
常知らぬ　道の長手を　くれくれと　いかにか行かむ　糧はな
しに〈一は云ふ、干飯は無しに〉（八八八）
家にありて　母が取り見ば　慰むる　心はあらまし　死なば死
ぬとも〈一は云ふ、後は死ぬとも〉（八八九）

出でて行きし　日を数へつつ　今日今日と　我を待たすらむ　父母らはも〈一は云ふ、母がかなしさ〉
一世には　二度見えぬ　父母を　置きてや長く　我が別れなむ〈一は云ふ、相別れなむ〉（八九〇）

（訳文は、巻五の作品については井村哲夫氏『萬葉集全注・巻第五』に、その他の巻については新潮日本古典集成『萬葉集』（以下『集成』）に拠っている）

山上憶良の「敬和為熊凝述其志歌」は、十八歳で相撲使の従者として旅立ち、安芸国佐伯郡高庭の駅家で命を落とした大伴君熊凝という少年（以下「熊凝」）に憶良が成り代わって両親への思いを告白した序文と歌六首で、題詞の「敬和」、そして配列などから分かる様に、当時大宰大典であった麻田陽春の歌（八八四、五。後掲）に「和」した作である。本稿は、当該作、特に長歌の表現に注目してその視点・性格を明らかにすることを目的とする。

二

本稿が特に取り上げるのは長歌であるが、その長歌を含めた当該作全体の問題を論じるためには、まず陽春歌への「敬和」について取り上げることが必要である。

大伴君熊凝の歌二首大典麻田陽春作

国遠き　道の長手を　おほほしく　今日や過ぎなむ　言問ひもなく（八八四）

朝露の　消易きあが身　他国に　過ぎかてぬかも　親の目を欲り（八八五）

陽春歌は一首目で異郷において死を迎える心情を、二首目で死に臨んでの親への想いを歌っている。家族との情愛と関わって用いられた「言問ひ」[1]、自らの身に対しての無常観の表出として用いられた「朝露の消やすき」[2]などが挽歌において初めて用いられていることが注目される（これ以前は全て相聞の情と関わって用いられている。各々の注参照）。これらの、家族との情愛や非業の死といったテーマを重視する憶良がそこに共感し、「敬和」する心情になった、という過程は容易に想像できる。

その「敬和」のあり様は序文、特に熊凝のセリフにあたる後半部にはっきりと現われている。仏教の説く無常の観念に基づきながら、死は逃れられないものであることを述べている「伝へ聞く」から「何にぞ能く逃避らむ」までは八八五に見られる無常観を、家で自分を待っている両親の悲しみが唯一の名残であることを述べている「但し我が老親」以下は、二首に共通する両親への強い思いをそれぞれ受けている、と見られる。また長歌にあってもそのあり様は病に倒れて以降の後半部に特に見ることが出来、「草」や「柴」といった、通常人間が身を横たえるべきではないものに身を横たえ、「国にあらば　父取り見まし　家にあらば　母取り見まし」と、行路死人歌的表現を用いて両親を思う描写は、八八四の、遠い異郷で親を思う構図を受けたもの、と捉えることが出来るのである。

しかしながらその様な「敬和」のあり様からして異質と思われるのは、長歌前半のいわゆる道行きの描写である。その道行きの描写

には力強さが感じられ、それに加えて「宮」「都」への羨望が際立って描かれており、これまで指摘してきた「敬和」に関わる内容とは必ずしも相容れないものがある。

長歌の前半部と後半部との関係を論じた最も一般的な見方は、中西進氏が述べられた「先の明るさは、この暗さの反措定として捉えられていた」[3]というものである。遠い異郷で親に会えずに亡くなることの悲惨さ（後半部）を際立たせるために道行きの描写（前半部）があるという、いわゆる明と暗の対比である。本稿も基本的にこの明と暗の対比という見方に則ってゆくのであるが、前半部の道行きの描写が余りに希望に満ちた力強いものを感じさせるものであることを考えた時、「遠い異郷で親に会えずに亡くなること」の悲惨さのみで長歌を解釈できるのか、という疑問が生じる。

その疑問を解消するために本稿が特に重視したいのは、芳賀紀雄氏[4]の見方である。氏は歴史学の知識、そして後半部の「犬じもの」という表現などから、（熊凝の）将来の栄達を望むという心情を見、都に象徴される公的権力の末端に連なろうとする若者の、明るい将来に向かっての歩みと二重写しになるものであった。まさに「為レ天不レ幸」して客死したという、明から暗へと一転した傷ましい事件が、陽春・憶良の心を打ったのだと解される。

と説かれる。「明るい将来に向かっての歩み」という氏の見方と長歌前半部の描写が一致することから、氏の説はおおむね肯われるものであることが分かる。つまり長歌前半部には、異郷での孤独な死への伏線という要素に加え、熊凝の将来に向けての希望や期待――即ち、「志」――の反映をも読み取ることが出来る、と考えられるのである。

本稿は熊凝の「志」を当該作全体のテーマの一つとして位置づけることを目的とする。その為には序文前半部の熊凝についての記述の検討、そして「志」の視点からの後半部の考察が必要である。それについては芳賀氏説の検討と共に四節以降に譲り、まずはその長歌前半部を表現に即して見てゆくことにしたい。

三　はじめに

前半部については、その道行きの描写の中に緊張感や不安といった要素を見出す見方が大勢を占めている。例えば、

見たことのない他国の奥の奥へと、山また山を越えて通り過ぎ、いつになったら都を見られるかと思いながら、よるとさわるとそのことを話題にしていたが…

という伊藤博氏の訳がその苦しく不安な心情を汲み取っていると見られ、他にも中西氏、岡内弘子氏などが「常知らぬ国の奥処」に注目して「緊張感」（中西氏）や「不安」（岡内氏）な心情を見出している。[5]しかし、具体的には後で触れるが、強調されているのはむしろ、熊凝の決意を象徴するかの様な際立った明るさである。以下、それを検証してゆきたい。

まずは「うちひさす宮」という冒頭の表現である。この「うちひさす」自体は「宮」にかかる枕詞で、その原文は、「打日指」（四・五三二）、「撃日刺」（七・一二八〇）、「打日刺」（十一・二三八二）、「内日刺」（十三・三二三四、三三二四）と、「日」が「刺」す（また

「指」す）ことを示す文字遣いを見せており、ここから明るい印象を持った語であることをまず予想させてくれる。歌からもその明るさは確認出来、例えば、

うちひさす　宮道を人は　満ち行けど　我が思ふ君は　ただひとりのみ（二三八二）

からは、「宮」という場所が人々を多く集める場所であったということが分かる。また、

うちひさす　大宮仕へ　朝日なす　まぐはしも　夕日なす　うらぐはしも…（三二三四）

は既設の宮ではなく行宮[6]ではあるものの、「大宮仕へ」が羨望を持って受け入れられていたことが分かるのである。これらのことから、「うちひさす宮」という表現から見出されるのは、「宮」が、特に地方からやって来る人々にとって羨望を集める晴れやかな場であった、ということである。

その様な晴れやかな「宮」へ熊凝は、母親の手を離れて出発する。ここでは「母が手離れ」、即ち母親から離れて旅立つということに注目してみたい。数は少ないのであるが、

たらちねの　母が手離れ　かくばかり　すべなきことは　いまだせなくに（十一・二三六八）

畳薦　牟良自が磯の　離れ磯の　母を離れて　行くが悲しさ（二十・四三三八、生部道麻呂）

の二例が参考になる。二三六八は恋の情の苦しさを詠んだ正述心緒歌で、「母が手離れ」は母親の手をわずらわせなくなったことを表していると思われる。四三三八は防人歌であるが、妻でもなく子でもなく「母」から離れることを「悲し」とうたっていることから、この道麻呂にとって、防人としての西下が親からの初めての旅立ちであった、ということが分かる。この様に見ると、「母が手離れ」ることは、親から〈自立〉することである、と考えることが出来るのである。偶然にも、掲げた二例は共に、初めての〈自立〉を表しており、当該歌の「たらちしや母が手離れ」にあっても、これらの例と同様、初めての〈自立〉を表していると考えてよいと思われる。このこと自体は既に稲岡耕二氏が「十八歳の熊凝の上京を始めて親の養育の手を離れることとして表す」と指摘されているのではあるが[7]、本稿にいう〈自立〉は、四三三八の道麻呂の如く（初めて）自分の所属する生活圏（親元としてもよいであろう）を離れて旅に出たり、職務に就くことを指して用いており、氏の述べる「親の養育の手を離れる」こととは異なるニュアンスで解したいと思う。とするとここまでの表現から、熊凝が十八歳にして初めて親から〈自立〉し「宮」へ旅立ってゆく、というシチュエーションを想定してよいことになる。そのことと「宮」「都」の明るい描写、そしてこの「相撲使の従人」が熊凝にとって初めての大仕事であること（このこと後述）も考え合わせると、その心情は決意に満ちたものであったと容易に想像出来るのである。

「常知らぬ　国の奥処を　百重山　越えて過ぎ行き」は、その具体的な道行きの描写である。不安な心情を見る説がこの部分を根拠としていることは前述の通りである。確かにこの描写には、不安を表す要素を容易に指摘出来る。例えば「オクカ」は

霞立つ　春の長日を　奥処なく　知らぬ山道を　恋ひつつか来

む（十二・三一五〇）

…神葬り　葬りまつれば　行く道の　たづきを知らに　思へども　験をなみ　居らくの　奥処も知らに…（十三・三二四）

と、「いちばん奥」[8]という意味合いであるが、「知らぬ」「知らに」などに結びつくことから分かる様に、〈無い、分からない〉という意識で用いられることが多い。その様な性格に照らして考えれば、「国のオクカ」は、初めて親の手を離れて旅立つ少年に、不安と恐怖を感じさせるものとなるであろう。「モモヘヤマ」にしても、他の例こそ無いが、高橋虫麻呂が

白雲の　龍田の山の　露霜に　色づく時に　うち越えて　旅行く君は　五百重山　い行きさくみ…（六・九七一）

と、同様の意味を持つ「イホヘヤマ」[9]という語を用いているのが参考になる。これは「幾重にも重なる山」という意味合いであり、西海道節度使として任に向かう藤原宇合の勇壮な姿を描き出すのに大きな役割を果している。別の言い方をすれば、宇合が「い行きさくむ」程に険難な山々を表明するのがこの「イホヘヤマ」である、と言える。ここから考えると、「モモヘヤマ」にも、その様に険難な山々という意識を見ることが出来る、と言ってよいのではないだろうか。とすれば、これも不安と結びつく要素となり得る。

当代の旅というものから見ても、それは明らかである。当代の旅が死と直面し、その為恐怖と不安を呼び起こすものであることは説明を要さない。その為、旅する者も家に残った者も様々な形で（行路の）無事を祈っている。「山」にあっても、越えるのにも難渋を余儀なくされる場所だけではなく、「畏敬すべき霊の蝟集する」が故に「支配する霊的なものに、ねんごろに手向けをしなければならなかった」[10]と見られている場所でもあり、手向けをする習俗が集中にも見られる（十二・三一五一、十三・三二四〇）。

即ち、「常知らぬ　国の奥処を　百重山」までは、わずか三句ながらも、想像以上に厳しい行路の様と、険難さと恐怖感が表現されているのである。

しかしながら、ここで注目すべきは、その様な厳しい、不安に満ちた道行きにも関わらず、それらが全て「越えて過ぎ行き」という一句でまとめられていることである。「スギユク」（又は「ユキスグ」）は、配流（三二四〇）や家郷の恋しさ（十五・三六二七）など、ネガティブの感情を伴って用いられる傾向があるが、当該長歌はそれらの例とは異なり、感情を伴っていない。感情が無い分、その厳しさに満ちた行路の表現によって、熊凝は緊張感を抱き、不安に満ち溢れて旅していると見られやすいことは認めなければならない。しかしながら、前に見た「宮」の有り様などから察するに、ネガティブな感情ではなく、むしろ先に引いた虫麻呂の描く宇合像の如く勇壮な心情が見られる、と考えられるのである。

ということは、この道行きにおいては不安よりも、むしろ前半部に一貫する、明るさというものが強調されている、と見た方がよいということになるのではないだろうか。先に、初めての親からの〈自立〉が決意に満ちたものであったことに触れたが、その決意がこれまで見てきた様な道行きの描写に反映していると捉えられるならば、熊凝の中でその決意は、自力でこの〈大任〉を果たそうという〈一人前の自覚〉にまで高められている、と考えることが出来るであ

ろう。

それらの描写に続く「語らふ」という語もやはり、契沖以来[11]「慰め合う」という様なネガティブな側面で捉えられてきた。集中では愛するものとの睦まじい語らいを表す傾向の強いものであるが（四・六六九など、憶良の例では五・七九四がある）、ここまで見てきたところを考えると、

…天皇の　神の御門に　外の重に　立ち侍ひ　内の重に　仕へ奉りて　玉葛　いや遠長く　祖の名も　継ぎ行くものと　母父に　妻に子どもに　語らひて…（三・四四三）

と、丈部龍麻呂が家族に強い決意を「語ら」っているのと同じ方向に取るべきであろう。そう解することによって、「都」に向かうこと、また自分たちの任務や将来の希望について、明るい雰囲気をもって語り合っている、という場面を想定できるのである。

この様に長歌前半部を見ると、目立つのは、熊凝のあこがれの心情を象徴するかの様な明るさであることが分かる。その、強いあこがれの理由を確認するのが次節の目的である。

四

熊凝のあこがれを解明するカギは、序文前半部の熊凝そのものの記述にある。おおまかには「熊凝は十八歳、相撲使の従人となって旅立ったが、途中で亡くなった」という内容であるが、これまでは公文書的[12]といったことが注目される位で、内容として余り重視されてこなかった様に思われる。

その序文前半部の中で最も重要だと思われるのが、「十八歳」と「相撲使」という二つの側面である。古くからこの側面に触れた見方はあったが、「骨折つて諷詠に上すほどの価値はありはしない」[13]、「云ふに足りない存在である」[14]と、否定的な評価しかされていなかった。本格的にこの二側面が作品理解に有益な形で考察される様になったのは、「十八歳」については村瀬憲夫氏、「相撲使」については芳賀氏[15]と、いずれも近年になってからである。本稿の、長歌前半部を中心として長歌を読み解く立場にとってこの二つの側面は看過出来ないものである。特にあこがれと強く関わるのは「相撲使」であるが、「十八歳」も歌の表現と切り離せないものであるので、併せて見てゆくことにしたい。

まずは「十八歳」である。村瀬氏は、令制などから「十八歳」を「歳役などする必要はない」「不安定な時期」と位置づけ、その様な「若年の身で公務に駆出され」たことを少年の悲劇と見る[16]。氏の見方は半ばは肯うべきものであるが、直接的に「悲劇」と結び付けられるかと言えば、必ずしもそうではない。実際、

・凡そ男の年十五、女の年十三以上にして、婚嫁許せ。（戸令・聴婚嫁条）
・謂く、入色年限、十七より起こすなり。（選叙令・授位条注文）
・凡そ選すべからむは、皆状迹を審らかにせよ。銓擬の日には、先ず徳行を尽せ。徳行同くは、才用高からむ者を取れ。才用同くは、労効多からむ者を取れ。（同・応選条）

といった令の規定を見ると、「十八歳」は結婚も出来るし、叙位も受けられ、任官の際には（大人と）同じ評価がされるといった様に、

どちらかと言えば大人としての側面が強い（即ち、「若年」とは割り切れない）ように思われる。

この様な「十八歳」の側面をもって見た時、「たらちしや母が手離れ」以降は、十八歳にして初めて親から〈自立〉して旅立ち、大人としての〈一人前の自覚〉に満ちて険難な行路をさしたる苦も無く越えてゆけるという勇壮な心情を表現したもの、と見ることが出来るのである。そう見ることによって、「悲劇」とはまた別の側面においてより熊凝に近いところでの心情の理解が可能になるのである。

次に「相撲使」である。同じ巻五に収録されている吉田宜の書簡にある「相撲部領使」と同じで、「相撲をとる者を催し集める為に地方に派遣された官吏」[17]であるが、「相撲使」そのものに関しては、必ずしも具体的な史料に恵まれない。管見に入ったのは、以下の二つである。

宜啓す。伏して四月六日の賜書を奉る。跪きて封函を開き、拝みて芳藻を読む。…今相撲部領使に因て、謹みて片紙を付く。宜謹啓、不次。（吉田宜書簡）

辛卯、勅して曰く、「如聞らく、「諸の国郡司ら、部下に騎射、相撲、膂力者と有らば、輙ち王公・卿相の宅に給る」ときく。詔有りて捜り索むるに、人の進るべき無し。今より今後、更に然ること得ざれ。…」とのたまふ。（『続紀』神亀五年四月辛巳）

前者はその宜の書簡で、いわゆる「松浦河歌群」（序文＋八五三～六三）を受け取った返礼としてこの書簡を帰還する「相撲部領使」に持たせたという。後者は騎射や相撲の選手を国司が連れてこないので、以後この様なことが無い様にという勅である（但し直接相撲使に言及したものではない）。この二つの資料から分かることは、相撲使に他の官人が接触出来るということ（宜書簡）と、相撲使も朝廷に仕える〈重要な職務〉であったということ（続紀）くらいであって、それだけでは作品理解に有益とは言い難い。

この様に資料に乏しい中、この「相撲使」の内実に迫り、その性格を熊凝に結びつけたのが、芳賀氏である。氏は当時の地方政治のあり方などの、歴史学からの知見を傍証にして、この「相撲使」を〈大任〉と評価する。以下に、そのポイントを押さえていると思われる箇所を掲げる。

・（任務の遂行が評価され――稿者注）国庁ないし郡家での勤務を続けて実績をあげ、遠い将来には郡司・郡散事・郡毅などとして相応の地位を占め、やがては叙位にもあずかって、それらを梃子に在地における自己の勢力を揺るぎないものにするといったようなことを、熊凝は思い描いていたのではあるまいか。

・相撲使の従人としての役目は、むしろ望ましいことであり、十八歳の熊凝にとっては、初の大仕事というべきものであったろう。[18]

氏の説からこの「相撲使」は、「十八歳」の熊凝にとって正に将来の栄達のために無くてはならないもので、むしろ望ましいものであったことが想像出来る。この見方に則れば、熊凝にとって、その職務を果すこと、またそこに至る道行きは必ずや希望に満ちたものであった、と推測出来るのである。

このことこそが、長歌前半部を読み解く上で欠かすことの出来な

い要素であると考えてよかろう。具体的に述べると、まず「都」「宮」への明るい羨望は、同時にその職務の遂行、そして将来の栄達への希望へと結びつく。具体的な心情としては「都に着くことが出来れば自分の任務が果たせ、将来は明るいものとなる」といったものであろう。「十八歳」にしての初めての〈自立〉が将来に直結するものであるとすれば、熊凝の心中は〈一人前の自覚〉を強く有したものであったと容易に想像することができる。道行きの描写が勇壮なのもこのことによって理解出来るし、「語らふ」も強い決意に支えられたものであると認められる。即ち、前半部の明るい道行きの描写は、「相撲使」という側面によってより自然な理解が可能となるのである。この「相撲使」という任務の持つ意味こそが、憶良が独自に見出した側面である、と考えられる。

ここまで、長歌前半部の描写一つ一つを追って熊凝の希望や期待を位置づけてきた。結果的にはいわば芳賀氏説の追認というべきものであったということは否定できないが、少なくとも（前半部の）全ての描写が熊凝の希望や期待へと結びついてゆくということは言えると思われる。そこで次に本稿が確認しなければならないのは、後半部の読解にこの「相撲使」の側面があてはめられるか、である。

五

前節までの様に、相撲使としての「志」を中心とした〈明〉の描写を前半部に見られるとすれば、〈暗〉の描写にあたる後半部にもその側面を持ち込むことが出来るかについて考えなければならない。まずは後半部の表現を、順を追って見てゆくことにする。

後半部は駅家の外に身を横たえる描写から始まる。表面的には「行路病者は忌み嫌われて、村外れの道角に横たえられることが多かった」[19]という、いわゆる行路死者の一般的な様態であることに疑いは無い。しかしながら一つ一つの描写に、前半部とも関わるものが見出せるのである。まずはそれを確認したい。

まず「隈」であるが、既に井手至氏に、葬地や他界、死に場所など、この現し世を去る者の行き着く場所であるという見方[20]があるが、行路病者はあくまで村外れに投げ出されるだけであって、亡くなるのはその後であることから、飛躍が大きい。この場合の「隈」のあり方を考える上で参考となるのは、旅と関わって「隈」が用いられている例のうち、

…道の隈　八十隈ごとに　嘆きつつ　我が過ぎ行けば　いや遠に　里離り来ぬ…（三二四〇、一説穂積老）

百隈の　道は来にしを　またさらに　八十隈過ぎて　別れか行かむ（二十・四三四九、刑部直三野）

の二例である。三二四〇は左注の「或書」に拠れば穂積老配流の時の歌、四三四九は防人歌である。これらにあっては共通して旅についての望まぬ心情が歌われており、それが「隈」によって更に暗く、深くなっているのである。つまり、この「隈」という場所は旅人にとって、暗い心情と憂いを呼び起こし、更にはその数を重ねる毎にそれらの心情が益々深化してゆくというべき場所であった、と言うことが出来ると思われる。

次に、寝床にする「草」や「柴」も、「草」は「雑草や雑木」[21]、「柴」

は「古来しばといえば、雑木など燃料とするものの総称名」[22]と夫々位置づけられており、具体的にも

人言は　夏野の草の　繁くとも　妹と我れとし　たづさはり寝ば（十・一九八三）

道の辺の　いつ柴原の　いつもいつも　人の許さむ　言をし待たむ（十一・二七七〇）

など、それらが道端に大量に生えている正に〈雑草〉そして〈雑木〉であり、うっとおしいまでに繁茂するものであることが分かる。これらを見ると確かに、燃料とする様な雑草、雑木という位置づけは正しいものとして受け取ることが出来る。とするとそれは、先に見た「隈廻」の状況そしてそこに込められた性格と合わせて考えることによって、ただの行路病者としてのあり方以上に（熊凝の）憂いや屈辱的な心情を強調するものになると考えられるのである。

ここで注目すべきは、この様な「隈廻」「草」「柴」から見出される、憂い深く屈辱的なイメージが、前半部に通底していた「宮」「都」の、羨望を集めるかの様な華やかなイメージとは全く正反対のものだということである。素材そのものから熊凝本人の感情を直接読み取ることは出来ないが、「嘆き伏せ」っているのであるから、その暗い状況の中で確実に憂いや屈辱といったネガティブな感情を抱いていたと考えられる。[23]そのことが（「嘆き」という形で）意識されるのは、道行きにおいて抱いていた強い決意が一転、病に冒されそこから動けなくなってしまった、即ち「都」（「宮」）において相撲使としての〈大任〉を果すことが出来なくなってしまったからなのである。

「国にあらば」以下は両親との別れに関わってくる描写であるが、「志」に引きつけて考えると、〈一人前の自覚〉に関わる部分となる。この表現は

…ぬばたまの　髪は乱れて　国問へど　国をも告らず　家問へど　家をも言はず…（九・一八〇〇、田辺福麻呂歌集）

といった、いわゆる行路死人歌に類似している。行路死人歌は、死者に出会った者が「家」や「名」を問うことによって死者の〈無名性〉を確認し、それが鎮魂の役割を果すといった性格を持っている。[24]だが、当該歌にあっては死にゆく者本人が「国」「家」にあっての両親の看護を思っている。死ぬ間際に両親を強く求めていると言い換えてもよいであろう。ということは、この「国にあらば…」は、行路死人歌としての〈鎮魂〉ではなく、死にゆく者の切実な心情を表明することに主眼を置いた表現であると考えるのが穏当、ということになる。切実な心情ということになると、ここにおいて、前半部で見えた、母親の手を離れて初めて自立して旅に臨む〈一人前の自覚〉と、後半部のこの心情が対比を見せていることが明らかになるだろう。具体的にいうと、両親の看護を望むこと――つまり、両親を強く求めること――は、母親の手を離れてから今まで一つの苦も見せずに険難な道行きを支えてきた〈一人前の自覚〉というものを否定する、ということなのである。

この、前半部との対比によって見出された、相撲使としての〈大任〉の遂行不可能・険難な道行きを支えてきた〈一人前の自覚〉の否定、という二つが、挫折という形で「志」をあてはめることの出来る要素だと考えられるのである。ただ、後半部は本節冒頭に触れた通り、表面的には行路病者の一般的な様態であり、「国にあらば」

以下は両親への思いに関わってくる部分であることから、それそのままで「志」が十全にあてはめられると言うことは出来そうに無い。

しかしながら注目すべきは、この「志」の挫折と共に、再び両親の顔を見ることをも否定されてしまった、ということである。前半部、そして序文（前半部）と関わる要素に加え、陽春歌と当該作に共通する親への強い思いをも否定されていることから、熊凝は全てを失ってしまったということが想像出来る。その様に想像する時極めて重要だと考えられるのが、「世間はかくのみならし」という表現である。

憶良はこの「世間」という語を、当該歌を除いた歌の中で六ヶ所（推敲前のものと思しき八〇四の異文は除く）用いている。そのうち、「令反惑情歌一首」長歌（八〇〇）の一例を除く五例が、当該歌と同じくネガティブな状況や心情を伴なった文脈の中で用いられている。訳文では「世の中」となっている歌もあるが、便宜上「世間」に統一して掲出する。

世間の　すべなきものは　年月の　流るるごとし　とり続き
追ひ来るものは　百種に　迫め寄り来る…
（「哀世間難住歌」長歌、八〇四）

…笞取る　里長が声は　寝屋処まで　来たち呼ばひぬ　かくばかり　すべなきものか　世間の道（「貧窮問答歌」長歌、八九二）

世間を　憂しと恥しと　思へども　飛び立ちかねつ　鳥にしあらねば（同短歌、八九三）

たまきはる　内の限りは（注は略）平けく　安くもあらむを　事も無く　喪無くもあらむを　世間の　憂けく辛けく…
（「老身重病経年辛苦及思児等歌」長歌、八九七）

…手に持てる　あが子飛ばしつ　世間の道
（「恋男子名古日歌」長歌、九〇四）

八〇四は長歌の総序的部分で、年月の流れに伴って老いや病が次々と身を襲うことを述べている。その具体相は後半部の男性の描写に見られ、肉体的なものだけではなく他者からの受容も否定されるという二重の苦悩が表明されていること、別稿に述べた[25]。八九二はいわゆる窮者一家の状況を受けての憶良の感慨である。風雪と寒さの襲う中、衣・食・住も無いに等しい環境にも関わらず里長が取り立てに上がり込んでくるという凄惨な状況である。八九三は反歌で、八九二の凄惨な環境を受けて、そこから逃れたくても逃れられないという憶良の苦悩が表明される。八九七は平穏無事の願い空しく老いと病に苦しめられる憶良の苦痛の吐露で、この後「死なな」と、死ぬことを選択しようとする。九〇四は長歌の末尾で、願い叶ってようやく生まれた一人子[26]が、成長の期待空しく病に冒され、必死の祈りの甲斐なく亡くなってしまったことを指して「世間の道」と表現されている。

これらの例を見て分かることは、憶良がネガティブなテーマの歌の中で「世間」を用いているとき、その歌の中には必ず否定的な要素が二つ以上重なって詠み込まれている、ということである。更に、八〇四や八九二、三の様に、それらの否定的な要素が〈全てを否定する〉状況を形成する例が見出されることも注目される。

ということは、当該歌の「世間はかくのみならし」にもその様な「世間」のあり方をあてはめられる、と言えるのではないだろうか。

異郷で両親の顔を見られずに亡くなることは言うまでも無いが、前半部に相撲使としての「志」を見られるとすれば、その前半部との対比で見出された、「志」の挫折も自ずからそこに含まれることになる、と考えられるのである。この様に考えることによって、熊凝がこの時点（後半部）において全てを失った、ということが一層明確になるのである。以上の様に考えた時、道ばたに犬のように放り出されて亡くなってゆくことを示すと考えられてきた「犬じもの」という表現は芳賀氏が見出した、漢籍に見られる「犬彘」「犬羊」という語の翻案で、〈つまらないもの、役に立たないもの〉といった意味合いであるということ[27]が蓋然性を得ると考えられる。今まで自分を支えてきた全てのものを否定された熊凝の悔しく、無念な心情を代弁する表現として最もふさわしいからである。

この様にみてくると、後半部の描写も「相撲使」としての熊凝の「志」をもって解釈することが可能となるのである。具体的に「志」に即した形で言えば、前半部で描かれた明るく、決意に満ちたものを感じさせる道行きは一転、人間のあるべきではない場所で孤独に死を迎えることによって憂い深く屈辱的な心情になる、ということである。その心情に関わってくるのは、「相撲使」の従者として都へ赴くという大任、その任務の遂行によって将来の栄達に結びついてゆくという希望、それらが一つになったところのいわゆる「志」（の挫折）である。無論、親への思いを中心とした明暗の対比という一般的な見方に沿うことが前提であるが、その中で「志」が長歌の明暗、即ち熊凝の心情に関わっている、と認めることは出来よう。

六

前節までの様に、当該作の主要なテーマが「相撲使」つまり官人としての視点で捉えられる可能性を有しているとすれば、最後に確認しなければならないのは、熊凝の「志」に注目し、同情を寄せる契機が作者である憶良にあり得たか、ということである。

『職員令』には様々な国守の任務が記載されている（令文の引用省略）が、「相撲使」やその他の官人たちに謁見するという外交折衝的な職務は存在しない。しかしながら、第四節に掲げた宜の書簡から、他の官人がこの相撲使に接触できるということが導き出せた。当然帰る途中の使たちをつかまえて文を渡すというのではなく、一応〈国務〉であるから、何らかの謁見の場があってその場で機会を得て渡されたもの、と推測される。ということは、（国守が）他の地域からやって来た官人たちに謁見するという職掌も当然あった、と考えてよいと思われる。そこには熊凝の様に、若くして大志を抱いてやってくる人物もあったであろう。また、「令反惑情歌」（八〇〇、一）の詠作契機となったいわゆる部内巡行があり、国内の様々な人々を見る機会にも恵まれていた。その中で憶良が見た人々の中にも大志を持って日々研鑽に励む若者が少なからずいたと想像出来る。

憶良自身の過去にも、熊凝と重ね合わせられる「志」を指摘できる。憶良が初めて名を見せるのは持統四年である（一・三四）が、それ以前は下級官人として厳しい職務に就いていたと考えられ、その中でもとりわけ写経生としての日々は肉体的にも精神的にも極め

て辛く、苦しいものであったと想像されている。[28] その様な官人生活の中で憶良は、必ずや将来の大成を思い描き、希望・期待を抱いていたであろう。それが、後に川島皇子の文学圏に加わることになり、また遣唐使の一員として唐に赴くことになったのであるから、憶良は、「志」を持つことが将来に結びつくということを、自身の経験をもって十分に理解していた、と言えるのである。憶良が〈大志〉に触れ得、心を動かされたことは十分に考えられることであろう。

即ち、憶良は国守として官人として、熊凝の「志」を十分に汲み取ることが出来たということが言え、更には、当該作のテーマは官人的な視点によって見出されたものであると認めることが出来るのである。当然「十八歳」である若く、将来もあったであろう熊凝が主人公だったことが不可欠なのは言うまでもないが、その様な人物の「志」の挫折であるからこそ、陽春歌（短歌）二首からかくの如く長大な作品が生まれた、と見るべきだと思われる。

以上見てきた様に、当該作は、熊凝が異郷において親に会えずに孤独に亡くなることに加え、相撲使の従者としての大任を果たし、将来の栄達をうるという「志」までも挫折するということをも読み取ることができるもの、と考えられるのである。このことによって、熊凝の無念な心情そしてこの事件の悲劇性をより深く、また現実に近いところでとらえることが可能となるのである。

この、相撲使の従人としての「志」、即ち官人としての視点は、当該作と、憶良の官人生活の回顧という側面を持っている帰京後の作品とを結びつける重要なカギとなると考えられるが、それについては別稿において詳しく考えることとしたい。また、本稿の様に長歌を解釈したとき、反歌の位置づけがどうなるかについては説き及ぶことが出来なかった。これについては他日を期すこととしたい。

注

（1）「言問ひ」については四・五三四、五・八一一、八一二、七・一二一一、九・一七五八、十・二〇六〇（七夕歌）、十一・二五六六、十二・二九三四、三一四三、三一八七。一二一一は「妹があたり」を行くというシチュエーション、一七五八は嬢歌会の描写であることから明らかである。八一二と八一三は「琴の娘子」との贈答に擬された書簡のやりとりで、八一二に「我が背子が手馴れの御琴」とあるので相聞歌と同様に考えてよいと思われる。

（2）「朝露の消やすき」については七・一三七五、十一・二六八九、十二・三〇四二、三〇四三。この句には「霜露」や「朝霜」といった語を用いた類句が多く見えるが、この句同様、おおむね相聞歌に用いられている。

（3）中西進氏「熊凝哀悼」『山上憶良』河出書房新社、昭和四十八年

（4）芳賀紀雄氏「憶良の熊凝哀悼歌」『萬葉集における中国文学の受容』塙書房、平成十四年、初出昭和五十九年六月

（5）伊藤博氏『萬葉集釈注』（以下『釈注』）、中西氏前掲論文、岡内弘子氏「山上憶良『熊凝の歌』」『香川大学教育学部研究報

告』十五号、平成元年三月

（6）例えば三二三四の場合は「伊勢の山辺の五十師の離宮を頌える歌」（新日本古典文学大系『萬葉集』、傍点稿者）という様に、行幸先のいわゆる「行宮」や離宮にあっても、常設の「宮」同様羨望をもって捉えられていた様である。

（7）稲岡耕二氏『和歌文学大系・萬葉集』

（8）『集成』

（9）吉井巌氏『萬葉集全注・巻六』

（10）北野達氏「旅の民俗」『万葉集の民俗学』（桜井満氏監修）桜楓社、平成五年

（11）契沖『萬葉代匠記（精撰本）』以降。

（12）藤原芳男氏「大伴君熊凝ノ歌」『萬葉作品考』和泉書院、昭和五十八年、初出昭和四十九年二月、久保昭雄氏「熊凝のためにその志を述ぶる歌」『筑紫万葉の世界』（林田正男氏編）雄山閣、平成六年など。

（13）金子元臣『萬葉集評釈』

（14）窪田空穂『萬葉集評釈』（以下『窪田評釈』）

（15）村瀬憲夫氏「熊凝の為に志を述ぶる歌」『万葉集を学ぶ・第四集』（伊藤博・稲岡耕二両氏編）有斐閣、昭和五十三年、芳賀氏前掲論文

（16）村瀬氏前掲論文。尚、『令』の引用は日本思想大系『律令』に拠っているが、注文については国史大系『令義解』を基にして私に書き下した。

（17）森本治吉担当『萬葉集総釈・巻五』

（18）芳賀氏前掲論文。氏の用いた素材ではないが、当時地方において行政の主導権を握っていたのは郡司を中心とした在地の首長層で、それらの職務の分掌を総括するのが国司（国守）であったという政治のシステムが確立されていた、という見方が吉田孝氏によって示されており（「郡司と在地首長（第三章第三節・奈良時代の社会と経済）」『日本歴史大系（普及版）2・律令国家の展開』山川出版社、平成五年）、このことからも芳賀氏の見方の正しさが立証される。

（19）『釈注』、『窪田評釈』など。引用は『釈注』。

（20）井手至氏「万葉人と『限』」『萬葉集研究』第八集、塙書房、昭和五十四年

（21）『釈注』

（22）山田卓三・中嶋信太郎両氏『万葉植物事典』北隆館、平成七年の「しば」の項目

（23）挽歌での「嘆き」は〈愛する者との別れを嘆く〉という一般的な例しか指摘できないが、憂いを強調した「嘆き」は集中にあり、筑波山登山の苦しさを指した九・一七五三、配流の過程を指した三二四〇、一、大君に身を捧げる苦しみを指した十六・三八五を特に指摘することが出来る。

（24）神野志隆光氏「行路死人歌の周辺」『柿本人麻呂研究』塙書房、平成七年、初出昭和四十八年

（25）拙稿「山上憶良の『哀世間難住歌』――『ますらを』の描写をめぐって――」『古代文学論集――村山出先生御退休記念――』平成十七年

(26) 伊藤氏「一人子の死」『別冊国文学・万葉集必携Ⅱ』学燈社、昭和六十二年

(27) 芳賀氏前掲論文。氏の説に漢籍の例は掲げられていないが、『佩文韻府』には、「犬彘」に『漢書』食貨誌上の「貧民常に牛馬の衣を衣て、犬彘の食を食す」、「犬羊」に『礼記』玉藻の「錦衣狐裘は諸侯の服なり。犬羊の裘には裼せず。…裘の裼は、美を見すなり」の例が夫々掲げられる。

(28) 写経生の職務の厳しさ、そしてその写経生と憶良との関わりについて詳しいのは、村山出氏『憂愁と苦悩　大伴旅人・山上憶良』(新典社、昭和五十八年)である。ただその他の職に就いていたとしても、当時は民衆の窮乏の深刻化に加え政治の惑乱や不安が表面化してきた時期であり(参考、北山茂夫氏「萬葉における慶雲期の諸様相」『萬葉の世紀』東京大学出版会、昭和二十八年)、平常を保って職務を遂行することはおよそ不可能であったと考えられる。

(やまもと　きょうすけ、北海道大学大学院博士課程)